

鈴木有郷牧師説教

4/10/2011

「ラザロ、出てきなさい」 ヨハネ11:38-44

ラザロはマルタとマリアの弟でした。不幸なことに、彼は病氣にかかり、亡くなります。二人の姉は大いに悲しみ、主イエスにその悲しみを訴えます。

二人の悲しみを真っ向から受け止めた主イエスは、ラザロが埋葬されている墓の前に行き、大声で叫びます。「ラザロ、出てきなさい。」すると、ラザロは、何と埋葬された時に巻かれた包帯を身体や顔に付けたまま、墓から出てきた、というのです。

私たちはこの記事を読んで、どう思うのでしょうか。気味が悪いと思うのでしょうか。そんな馬鹿なことが、と思うのでしょうか。

しかしこのエピソードには深い意味が込められているのです。主イエスと私たち人間の関係を明らかにする絵解きが、この物語の目的なのです。

イエスの時代において、墓は一つの象徴的意味を持っていました。すべての人間の内面を埋め尽くす暗闇がそれです。墓は猜疑心、憎しみ、自己中心性、怒りの象徴でした。つまり、墓は人間の罪を象徴する言葉でもあったのです。

そのことを頭に置いてこのエピソードを読み返すと、それが言わんとする最も大切なことに気づきます。それは四つの点に要約できます。

第1の点。私たち人間は暗闇の中にいると、このエピソードは語ります。私たちの愛は狭く、自己中心的です。私たちは神を仰ぎ見ることをせず、隣人を愛することもしません。私たちは自分の幸せだけを考え、見知らぬ他者の善を願うことをしません。私たちには優しさと慈しみが欠けています。聖書の言葉を使えば、私たちは罪人です。今日のエピソードの言い方を借りて言えば、私たちは墓の中にいます。私たちはラザロです。

第2の点。主イエスは私たちを墓の暗闇から連れ出し、太陽が輝く世界へと導いてくださる、と言うのです。主イエスは自己の中に閉じこもりがち私たちを他者に向けて解放して下さると言うのです。人間の間人らしさを私たちの中に注ぎ込んでくださる、と言うのです。その意味で、主イエスは人間解放の主であり、救い主です。

そして第3の点。それは、私たちは二つの選択肢の前に立っているということです。果たして、私たちは主イエスの、「ラザロよ、出てきなさい」という声に耳を傾けるのでしょうか。それとも、聞く耳を持たず、無関心を決め込むのでしょうか。私たちはどちらかを選び取らねばなりません。

第4の点。主イエスの声を聞くには、それを聞こうとする積極的な意志が必要です。多くの雑音の中から聞こえてくる主イエスの声を聞き取る繊細な精神が必要です。

先週、日本に住む友達がメールで次のようなエピソードを知らせてくれました。

被災者のシェルターになっている仙台の小学校であったことです。ボランティアの人たちがお弁当の入ったプラスチックの袋を配っていました。並んでいた人の中に9才の少年がいました。この寒空の下で、シャツと半ズボンでした。

ボランティアの一人が聞きました。「お父さんやお母さんは？」お父さんは目の前で車ごと流され、お母さんと妹はどこにいるか分からない。そう言って少年は涙を拭きました。

あまりにも不憫なので、ボランティアの人は、お弁当をもう一つ少年に与えました。少年はお辞儀をし、お礼を言うと、そのお弁当をまだ配っていないお弁当の山の上に置きました。

ボランティアが尋ねました。「君、お腹空いてないの？」少年は答えました。「僕はもうもらったからいい。僕よりお腹が空いている人がいるから、そういう人に食べてもらいたい。」

この少年を通して響き渡る主イエスの声を私たちは聞かないのでしょうか。「ラザロ、出てきなさい」という声を聞かないのでしょうか。私たちが人間らしくあろうとする時、いかなる困難も、いかなる苦難も、死きさえも、主イエスと共に歩む限り障害にはならない、と言う声を聞かないのでしょうか。

主イエスこそ道です、真理です、命です。我らの歩みを灯す灯火です。主イエスこそ我らの人生を支える岩です。櫓です。勇気と希望の源です。